



公認会計士・税理士・作家

山田真哉さん

2005年の著書「さおだけ屋はなぜ潰れないのか?」は、会計を扱った新書本ながら、160万部のベストセラーになった。書店に並ぶ山田さんの著作の特徴を一言で言えば、会計や税金の世界を扱っていながら「わかりやすい」ということだ。このわかりやすく説明する技術は、弁護士にとっても大いに参考になると思われる。

また、若手の公認会計士・税理士として、これからの時代をどのように生き抜くかという点でも、興味深いお話を伺えた。

(聞き手・構成：町田弘香、伊藤敬史)

——ミリオンセラーになった御著書「さおだけ屋はなぜ潰れないのか?」は、身近な事例から会計的な考え方がわかりやすく説明されていて、とても新鮮でした。この本をお書きになったきっかけは何ですか。

「さおだけ屋はなぜ潰れないのか?」を書く前に、「女子大生会計士の事件簿」というシリーズで何冊か本を書いていたことから、いろいろな出版社から会計本の依頼があったのがきっかけです。

——「女子大生会計士の事件簿」シリーズとはどのような内容なのでしょう。

公認会計士の仕事や日常を描き、同時に会計についての知識を学ぶことが出来るような内容になっています。私の公認会計士受験時代、実務が何かさっぱりわからず、それがわかるような本もなかったので、受験生などに公認会計士が何をしているのかを知ってもらうために書きました。

——「さおだけ屋はなぜ潰れないのか?」は、非常に

インパクトのあるタイトルで、タイトルを読んだだけで、手に取りたくなる本だと思いますが、いかがですか。

自分でもタイトルを思いついたとき、これは売れるかな、と思いました。さおだけ屋が何故潰れないんだろう、というおそらく多数の人がもっている潜在化した疑問を可視化したのがヒットした秘訣かなと思います。

——このタイトルは、2005年の流行語大賞の候補にも入りましたね。

そうですね。もっとも候補作品は多数あったので、候補に入るだけならたいしたことはないと思いますが(笑)。その後、私も知人と企画をして、昨年からですがお台場で「日本タイトルだけ大賞」というイベントを行っています。これは、書籍の内容については全く検討せず、タイトルのみのコピー、面白さが際だつ書籍を表彰しようというものです。ちなみに、2009年の大賞は、「ヘッテルとフエーテル」という経済入門書に決まりました。

——それもなかなかインパクトがあるタイトルですね。ところで、「さおだけ屋はなぜ潰れないのか？」のようなタイトルを考えつかれるということは、日常的に注意深く周囲を観察していらっしゃる結果ではないかとお見受け致しますが。

色々考える努力はしています。例えば、コンビニにあるレシートボックス。ああいうのも、ぼんやりと「ああ、あるな」と思うのではなく「何故置いてあるのかな」と考えます。私は、あれはただのゴミ受けではなく、持って帰らせることで消費者にこんなに沢山コンビニで買い物をした、と反省させないために置いてあるとよんでいます。だから、私はあれを「悪魔の箱」と名付けています。

——その後「食い逃げされてもバイトは雇うな」を出版された後『「食い逃げされてもバイトは雇うな」なんて大間違い』という真逆のタイトルの本を出されましたが、最初から2冊出されることは考えていらしたんですか。

はい、会計の二面性について、本を出そうと思いましたが、ただ、ひとつのタイトルで上・下にして出版しても面白くないので、ああいうタイトルで二冊出しました。

——「さおだけ屋はなぜ潰れないのか？」に戻りますが、内容について、なにか工夫されたことはありますか。

会計本は、私が「さおだけ屋」を書く前にも何冊も出版されています。そういう本とは違って、数字を使わず、普通の人にもわかりやすい内容にしたいと考えました。

——わかりやすく、と言えば、依頼者にわかりやすく説明するのが弁護士の大事な仕事の1つだと思いますが、やはり、そのような工夫を業務上なさっていらっしゃいますか。

はい、専門的なことをつきつめることと、わかりや

すく説明することが専門家の仕事だと考えています。私は、沢山のことを一度に言うのではなく、分けて、一度に1つか2つしか伝えないようにしています。

——そうすると、機会を改めて、また1つか2つ伝えるということですか。

そうです。そうして、例えば、メールで5つのことを相手に伝えたい場合、あえてメールを5通に分けて送ったりします。それから、強調したいことは、わざと「追伸」として記載するとか。

——なるほど。それはいい考えですね。その他にも工夫をしていらっしゃることはありますか。

「さおだけ屋」のような身近な例を出すとか、キャッチーな言葉を使うとか、書面で伝えるときは、罫線で囲むとか、ポイントをかえるとか、ですね。図とか表は労力の割に相手に伝わらないのであまり使いません。また、あるテーマについて初めて説明するとき、入り口で失敗すると後々まで響くので、小難しく説明しないようにしています。とにかく、何を言うかは、言う順番をどうするかとあわせて、相手の理解を得るためにとても大切なので、事前によく考えてから説明をするようにしています。

——それはとてもよいお考えですね。弁護士業務を行う上でも、参考になります。ありがとうございます。ところで、公認会計士の仕事の魅力はどこにありますか。

大企業から中小企業まで、いろいろな会社の中に入れる、しかも金の話なので、会社の中枢を見られるのが面白いですね。

——公認会計士協会は、強制加入団体ですか。

そうです。弁護士会と同じです。ただ、会費は年間10万円強ですが。

テーマは、いかに時代についていくか。国際会計基準の導入、消費税の増税、法人税の減税などが取りざたされていますが、そういう時代の変化にどう対応していくかです。

山田 真哉



—公認会計士試験には毎年何名くらい合格するのでしょうか。

私が受かった平成12年は、800名位でした。その後、平成20年には約3000名まで増えましたが、若手が食べていけないという話になり、平成21年は約2000名に減っています。

—司法試験合格者人数の増加と同じような動きですね。

はい。公認会計士の人数も私になった頃は、全国で1万人程度でしたが、今は2万人になっていて、いずれ5万人になると言われています。

—5万人時代を生き抜く為の工夫などありますか。

他の公認会計士との差別化、ですね。私の場合、出版活動、テレビなどへの出演活動などですね。

—弁護士も今いろんな番組に出ています。

そうですね。そのせいか、今では、弁護士は色々なキャラクターの人がいる、という風な社会的認知をうけていますね。ただ、公認会計士はそうはいかないし、公認会計士の資格の価値の劣化は、自分の為にも、業界の為にも避けたい、従って、発言などは慎重であるべきと私は考えています。

—今後の活動の抱負などあればお聞かせ下さい。

いかに時代についていくかというのがいつもテーマです。今、国際会計基準の導入、消費税の増税、法人税の減税などが取りざたされており、そういう時代の変化にどう対応していくか。また、国民全員に確定申告させるようにしよう、という流れがあり、そうすると確定申告をするのが2000万人から1億2000万人に増えます。そうすると業界が変わります。

—国民全員が確定申告をするとなるとそれを処理するための国家予算もかなり増額する必要がありますよね。

そうですね。ですから、IT業界とか、税理士業界がその流れの裏にいる、という話もあるようです。

プロフィール やまだ・しんや

1976年、神戸市生まれ。大阪大学卒業。2004年、公認会計士三次試験に合格後、独立して公認会計士山田真哉事務所を開設。2005年、「さおだけ屋はなぜ潰れないのか?」を出版、ミリオンセラーを達成。現在、新聞、雑誌等で連載を抱えて、活躍中。